

年間第二十一主日

2010.8.22

(ルカ 13・22-30)

今日のイエスさまのおことばの中で、最も私たちの気になるのは、「狭い戸口から入るように努めなさい」というおことばではないかと思えます。今日の福音のおことばはルカ 13 章にあるおことばですが、同じ内容のおことばはマタイ福音書の 7 章にもあって、そこでは、「狭い門から入りなさい」と言われており、こちらのほうが、「狭き門」という言い方があるように、私たちにはなじみ深いかもしれません。狭き門にしる、狭い戸口にしる、問題は、この表現をもって、イエスさまは何を私たちに語ろうとしておられるか、私たちはイエスさまの、よく知られているこのおことばをどのように受け止めたらいいかということです。「狭い門」「狭い戸口」という表現はさまざま受け止め方ができると思いますが、まずは、この表現がイエスさまのおことばの中で、どのような文脈で語られているか、聖書を開いてみる必要があります。先程のマタイ福音書 7 章 13 節からの全体のおことばを見てみると、「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道は広々としていて、そこから入る者が多い。しかし、いのちに通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見出す者は少ない」と言われており、狭い門は、滅びに通じる広い門に対して、いのちに通じる門であることが分かります。滅びと言い、いのちと言う時、私たちが信仰において受け止めている、いのちあるいは滅びは、永遠のいのちであり、滅びです。狭い門、狭い戸口とは、永遠のいのちに至るための門であり戸口です。このことは、今日のルカ福音書では、神が私たちすべての者をそこに招こうとしておられる「神の国の宴席」という終末論的な表現によって、いっそう際立っています。この戸口を家の主人が閉めてしまってからでは、外に立って戸を叩いても遅いというおことばを、私たちはどこまで真剣に受け止めていると言えるでしょうか。

それにしても、肝心の狭い門、狭い戸口は一体どこにあるのでしょうか。私たちはイエスさまが言われる、いのちに至る狭い門をどこに見出すのでしょうか。今日のルカ福音書とそれと関連するマタイ福音書の文脈とは異なりますが、狭い門の「門」ということばを、ヨハネ福音書の中にも見出すことが出来ます。ヨハネ 10 章の、「わたしはよい羊飼いです」と言う、私たちになじみ深いおことばの箇所では、イエスさまは「わたしは門である」とも言われています。ヨハネ 10 章 9 節からの箇所では、このように言われています。「わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たの

は、羊がいのちを受けるため、しかも豊かに受けるためである」。ヨハネ福音書のこのイエスさまのおことばを考え合わせると、狭い門、狭い戸口とはイエスご自身を指してのおことばであると受け止めることができます。私たちが信じるイエス・キリストは、父なる神がその御子であるイエスを私たちの世界に遣わされることによって、イエスを通して私たちすべての者を招いておられる永遠のいのちへの戸口であり門であるのです。

福音書の中には、イエスさまによって病気や不自由なからだを癒していただいたり、悪霊を追い出していただいた、たくさんに人々のことが語られています。そして、イエスさまが行ってくださったそれらの奇跡の業を目の当たりにして神さまを賛美した、群集と呼ばれているたくさんの人々のことが語られています。イエスさまを囲んで食事の席に着いたレビの友人であった徴税人たちや、イエスさまを食事に招待したファリサイ派の人々のことが語られています。何よりも、イエスさまのもとに最後までつき従った十二人の弟子だけではなく、イエスさまの教えに喜んで耳を傾け、イエスさまの後に着いて行った大勢の人々がいたことも語られています。これらの人々のその後はどうなったのでしょうか。福音書はそのことについて、ほとんど何も語っていません。ただ、イエスさまの十字架の場面には、ごく少数の弟子たちと、イエスさまにつき従ってきた婦人たちの姿しかありません。復活されたイエスさまがそのお姿を現してくださり、そのことによってイエスさまの復活を信じるようになった人々の中に、それまでイエスさまと出会ったはずの多くの人々の姿はありません。イエスさまがその十字架の死と復活によって私たちにもたらしてくださった神さまの救いのみわざを信じて、永遠のいのちの約束を受けた人々の中に、福音書の中に語られていた大勢の人々のうちのどれほどの人が含まれているのか、私たちはわかりません。

今日の福音で、戸口が閉められてから、外に立って戸を叩きながら人々が叫ぶことばに、私たちは真剣に向き合わなければならないと思います。「私たちは、ご一緒に食べたり飲んだりしましたし、私たちの広場でお教えを受けたのです」。しかし、このように叫ぶ人々に対して、いったん戸が閉められてからでは、それは開かれることはないと言われているのです。イエスさまは、永遠のいのちへの門であり、そして、神さまから遣わされた、永遠のいのちの門であるイエスさまは、そのような門である、いったん閉ざされると開けてもらえない、開かれている間に入らないと、閉められてしまう門であると今日の福音は、私たちに対しても警告を発しているのです。

イエスさまの門が狭いのは、それが永遠のいのちへの門だからです。この世に

生きる私たちは、イエスキリストの時代もそして今の私たちの時代も、本当には永遠のいのちということの問題にはしていないからです。イエスキリストがもたらしてくださった、永遠のいのちの約束のありがたさが本当には分かっていないからです。狭い門を狭くしているのは、この世のことだけが全てであるかのような、私たちの生き方そのものです。

キリスト教に限らず、全ての伝統的な宗教の信仰の核には、来世への信仰があります。けれども、今の時代、そのような来世信仰を中心に置く、伝統的な宗教的価値観は世俗化の波に洗われ、人々の心を惹きつける魅力を失っているかのようです。けれども、私たちが信じるイエスキリストがもたらしてくださった、永遠のいのちの約束を無視する時、私たちのこの世界がどのようなものになってしまうか、私たちは経験しているはずです。この世が全てであれば、そこにおけるよりよい生活を求めて、全ての人々が我先にと先を争うこととなります。この世の幸不幸だけが私たちの人生の意味を、私たちの人間としての価値を決めてしまうこととなります。人間として人間らしく生きるとはどういうことなのか、全ての人を納得させることできる基準が見出せなくなってしまう。その結果、一人ひとりの人が、自分が幸せだと思える生き方をすればよいということになってしまいます。そのような世界の中で、私たちの生活が、私たちの人間としてのいのちがどのような脅威に曝されているか、日々伝えられるニュースを通して、私たちは見聞きしているはずです。

「狭い戸口から入るように努めなさい」との今日の福音のことばは、今もなお、いや、今こそ、私たちがそれに向かって、真剣に心を向けるべき、神からの使者としてイエスキリストの私たち全ての者に対する、招きのことばです。

今日のミサで、私たち自身の日々のありようを反省しながら、なお開かれている戸口からの主の招きのおことばに向かいあいたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高